

ヘミングウェイ作品における マニュスクリプト研究 (2) —— 『エデンの園』 を中心に ——

フェアバンクス香織*

[要旨] 本研究は、文学作品におけるマニュスクリプト研究／生成批評の歴史を概観し、それらがヘミングウェイ作品においてどのように展開されてきたかを明らかにすることに主眼を置いている。本稿では特に、ヘミングウェイ作品におけるマニュスクリプト研究がもっとも盛んに行われた1980年代後半以降に焦点を当て、当時のマニュスクリプト研究の特徴を探る。

1 はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の死後出版作品の中で、マニュスクリプト研究／生成批評がもっとも盛んに行われているのは、1986年に出版された『エデンの園』(*The Garden of Eden*) である。性役割交換や日焼け、さらにはバイセクシュアルを含めた三角関係が繰り広げられる当作品は、ヘミングウェイが生前に築き上げた(と同時に「築き上げられた」)ハードボイルドで男性的なイメージの再考を批評家らに強く迫ることとなった。また、ヘミングウェイ文学の批評史においても、生前に出版された「エリオット夫妻」(“Mr. And Mrs. Elliot”)、*「簡単な質問」* (“A Simple Enquiry”)、*「海の変容」* (“The Sea Change”)、*「オカマ野郎の母親」* (“The Mother of a Queen”) などの作品を、同性愛や性倒錯、両性具有といったテーマからあらためて読み返す必要性を訴える契機にもなった。

ヘミングウェイの没後25周年に起きた『エデンの園』をめぐるこのセンセーショナルな出来事の裏側では、編纂者トム・ジェンクス (Tom Jenks) の編纂作業に疑問を呈する声徐徐に強くなっていった。そして当作品のオリジナル原稿へのアクセスが可能になると、ジェンクス編纂の功罪を明らかにしようとする動きが一気に加速していった。バーバラ・プロブスト・ソロモン (Barbara Probst Solomon) は「ヘミングウェイの出版社は、文学的な意味における

* 助教／アメリカ文学

犯罪 (a literary crime) を犯した」(31) と糾弾し、ローズ・マリー・バーウエル (Rose Marie Burwell) やロバート・E・フレミング (Robert E. Fleming) もジェンクスが仕立て上げた物語の結末を強く非難したのである (Burwell 198, Fleming 130)。

『エデンの園』におけるマニュスクリプト研究の動向は、大きく二分できる。ひとつは、生前出版作品のマニュスクリプト研究に多く見られた、オリジナル原稿と出版本とのテキスト比較による差異の指摘である。そしてもうひとつは、カットされた場面を出版本に組み入れることによって、ジェンダーやセクシュアリティに対するヘミングウェイの欲望を浮き彫りにしようとする試みである¹⁾。前者の代表例としては、西尾巖とクリス・L・ネスミス (Chris L. Nesmith)、後者については、ナンシー・R・カムリー (Nancy R. Comley) とロバート・スコールズ (Robert Scholes) から、カール・P・エビー (Carl P. Eby)、デブラ・A・モデルモグ (Debra A. Modellmog) へと連なる系譜がよく知られている。本稿では、これらの先行研究を順に確認していく。

2 オリジナル原稿と出版本の比較

西尾巖は、『ヘミングウェイと同時代作家——作品論を中心に』(1999)の最終章「ヘミングウェイ没後作品の命運——『エデンの園』の実態」において、当作品のオリジナル原稿と出版本との相違点について言及している。ジョン・F・ケネディ図書館にある「ヘミングウェイ・コレクション」での原稿調査の成果をもとにした当章は、語句や文の削除、挿入、言い換えや訂正といった微視的なものから、段落等、ある程度まとまりのある文章の入れ替えといった巨視的な指摘にまで及んでいる。以下、後半の指摘の中からいくつか紹介する。

まず西尾は、前後の脈絡を無視してオリジナル原稿の順序が変更され、その間にジェンクスによる繋ぎの文が挿入されているため、ヘミングウェイの意図が反映されたものとは言い難い内容になっていると指摘する。西尾はその代表例として、オリジナル原稿の第2章 (出版本: 21頁32行目～22頁18行目) を挙げて解説している。

<出版本>

(7) “No.” He touched her forehead and her nose and then her cheeks and chin with the oil and then put it carefully above and behind her ears.

(a) “I want to get behind my ears and neck tanned and over my cheekbones. All the new places.”

(4) “You’re awfully dark, brother,” he said. “You don’t know how dark.”

(3) “I like it,” the girl said. “But I want to be darker.”

(1) They lay on the beach on the firm sand that was dry now but still cool after the high tide had fallen. (2) The young man put some oil on the palm of his hand and spread it lightly with his fingers over the girl’s thighs and they glowed warm as the skin took the oil. He went on spreading it

over her belly and breasts and (6) the girl said sleepily, (5) “We don’t look very much like brothers when we’re this way do we?”

“No.”

(b) “I’m trying to be such a very good girl,” she said. (c) “Truly you don’t have to worry darling until night. (d) We won’t let the night things come in the day.”

(GE 21-22; 番号およびアルファベットは西尾 192-93 による)

(1)～(7)の番号は、オリジナル原稿における各文章の元の順序を示している。また(a)～(d)は、元はオリジナル原稿第1章の末尾にあった文章で、いずれもジェンクスによってカットされたものである。上記の引用箇所から一目瞭然の通り、出版本では番号(1)～(7)が順不同に並べ替えられ、ところどころ(a)や(b)などの文が挿入されている。これは、ジェンクスが編纂の過程で、オリジナル原稿の文章を単に削除しただけでなく、残した文章を(章を隔てて)入れ替えていたことも示している。

また西尾は、ジェンクスによって完全に抹消されてしまったシェルドン夫妻(ニックとバーバラ; Nick and Barbara Sheldon)の登場場面に着目、ボーン夫妻(デイヴィッドとキャサリン; David and Catherine Bourne)と4人で言葉を交わす以下の場面に、ジェンクス編纂の杜撰さが明確に打ち出されていると主張している。

<オリジナル原稿> デイヴィッドとキャサリン、ニックとバーバラの4人の会話

① “Did you get going, Dave?” Nick asked.

② “Good enough,” David said.

③ “That’s fine. Today’s the first day I haven’t worked since the last time we were rained out.” [Nick said.]

④ “You worked then.” Barbara said.

(198-99; 下線は西尾、番号は引用者による)

↓

<出版本> デイヴィッドとキャサリンの2人の会話

⑤ “Did you get going?” the girl [Catherine] asked.

⑥ “Good enough.”

⑦ “You worked then. That’s fine.”

(196; 下線は西尾、番号は引用者による)

シェルドン夫妻の存在を消すために、①のセリフを発した人物がニックからキャサリンに変更されただけでなく、③(ニックのセリフ)と④(バーバラのセリフ)を部分的に抽出して、キャサリンのセリフ⑦が仕立てられたことが分かる。西尾は、このように登場人物の発言が操作さ

れている箇所を他にも多数紹介しながら、ジェンクスが行った「独り相撲」(201)を強く批判している。

また西尾は、『エデンの園』の中の短編「アフリカ物語」についても編纂の影響を調べている。もともと『エデンの園』は劇中劇の仕組みになっており、デイヴィッドがアフリカでの思い出を綴った短編二編が盛り込まれていた。その中でも特に、巨象狩りの話がもっともまとまりがあると言われている。これは、少年時代のデイヴィッドが父親に立派な牙をもつ老象の居所を教えたがゆえに象の命が狙われてしまい、罪の意識に苛まれるという話である。この話はオリジナル原稿から抜き出されて「アフリカ物語」(‘An African Story’)という題名が付され、1987年出版の『ヘミングウェイ短編全集』(*The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, 1987)に収録された。

この巨象狩りの話は、スクリプナーズ版では、デイヴィッドとキャサリン、マリータ (Marita) の三角関係が描かれる過程で、計5章(18、20、21、22、24章)にわたって分散して展開されている。つまり「アフリカ物語」に関しては、オリジナル原稿とジェンクス編纂によるスクリプナーズ版、そして『ヘミングウェイ短編全集』版の三種のテキストが存在することになる。西尾はこれら三つのバージョンの語句等の削除や挿入、言い換え、訂正の数をそれぞれ調べている。そして比較の結果、ジェンクスが施した編纂(スクリプナーズ版)のいくつかが、『ヘミングウェイ短編全集』版では元に戻されていると指摘した。

頁数・行数 (スクリプナーズ版による)	オリジナル原稿	スクリプナーズ版 (ジェンクス編纂)	『短編全集』
165頁11行目	dying	drying	Dying
171頁9行目	as	削除	As
172頁30行目	on	of	On
179頁16行目	, (コンマ)	削除	, (コンマ)
180頁1行目	, (コンマ)	削除	, (コンマ)
197頁2行目	traveling	travelling	Traveling
202頁8行目	any more	anymore	any more

(西尾 207 を元に引用者作成)

「アフリカ物語」が未完成作品であったとはいえ、できる限り原文に忠実であろうとする姿勢が『ヘミングウェイ短編全集』の編纂からは垣間見えるだろう。またこれはジェンクスの編纂作業が「非常に乱暴なものであった」(208)ことを逆説的に強めることにもなる。

またネスミスも論文“‘The Law of an Ancient God’ and the Editing of Hemingway’s *Garden of Eden*: the Final Corrected Typescript and Galleys”において、ジェンクス編纂の杜撰さと不誠実さを厳しく批判、ジェンクスが行った校訂箇所のリストを作成した。ネスミスは特に、ジェンクスが出版版で「いくつかの文を削除しただけで、加筆はいっさいしていない」(Nesmith²⁾)こ

とを強調しながらも、実際には削除の仕方が粗雑であることを、以下の引用を例に示している。

<オリジナル原稿>

... and the girl watched the absinthe cloud opalescently. It felt warm as her fingers held the glass and then as it lost the yellow cast and began to look milky it cooled sharply and the young man let the water fall in a drop at a time.

(GE 38-39)

↓

<ジェンクスによる編纂>

... and the girl watched the absinthe lose its yellow cast and begin to look milky and the young man let the water fall in a drop at a time.

(Nesmith)

またネスミスは、ジェンクスが、場面の入れ替えといった大掛かりな変更を比較的安易に行っていた点も問題視している。この点についてはジェンクスも、次のようにシェルドン夫妻のプロットを完全に削除するために場面を入れ替えたことを認めている。“That last part came from another place in the manuscript altogether... I had to remove the two characters they [David and Catherine] met in the cafe, so I healed the gap by taking the narrative from a different eating scene that I didn't have room to use.” (Pooley 58)

3 登場人物をめぐる性

1986年に出版された『エデンの園』は、これまでの作品では見られなかったような性の有り様が赤裸々に描かれていることから、先に述べたように、ヘミングウェイ研究の潮流をセクシュアリティの問題に大きく転回させる一大転機となった。翌年の1987年に発表されたケネス・リン (Kenneth Lynn) の評伝『ヘミングウェイ』(Hemingway) は、ヘミングウェイが幼少期に1歳年上の姉マーセリーン (Marcelline) と同性の双子として育てられたという伝記的事実³⁾を重視、心理分析の手法を使って彼のセクシュアリティに迫ろうとした。このリンの研究は、1990年に出版されたマーク・スピルカ (Mark Spilka) の『ヘミングウェイ：両性具有との争い』(Hemingway's Quarrel with Androgyny) や今村楯夫の『ヘミングウェイと猫と女たち』に継がれ、ヘミングウェイ作品における作者の両性具有願望をあぶりだす両性具有論が、ヘミングウェイ研究の新たな主流として展開されていったのである。

その後『エデンの園』におけるこうしたセクシュアリティ研究に、マニュスクリプト研究が加わることになる。1994年のカムリーとスコルズの『ヘミングウェイのジェンダー——ヘミングウェイ・テキスト再読——』、1995年のカール・エビの論文“‘Come Back to the Beach

Ag'in, David Honey!': Hemingway's Fetishization of Race in *The Garden of Eden* Manuscript', そして1999年のデブラ・モデルモグの『欲望を読む——作者性、セクシュアリティ、そしてヘミングウェイ』(*Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*)である。特に、モデルモグは両性具有論の問題点を指摘するとともに、『エデンの園』のオリジナル原稿を手掛かりにヘミングウェイの同性愛指向を追及していった。ここでは、ヘミングウェイのセクシュアリティ研究にマニエスクリプト研究が交わることによって、『エデンの園』論がどのように展開されてきたかを概観する。

まず、カムリーとスコールズは、『エデンの園』のオリジナル原稿にみられる性役割交換と異種混交に焦点を当てることによって、ヘミングウェイの慣習を逸脱したセクシュアリティへの関心を明らかにした。作中のところどころにみられる、キャサリンの日焼けに対する強い意思と肌を黒く焼く行為が、白人からアフリカ部族の人間になるという人種の越境を意味すると解釈したのである。カムリーらは、出版本においてはそれほど明らかでないもののオリジナル原稿に明確に打ち出されていることの一つとして、肌を黒くするというキャサリンの人種越境的行為がセクシュアリティの越境に深く結びついていること、またその日焼けがセクシュアリティの越境を彼女の身体に刻みつける印となっていることを指摘した。

She [Catherine] changes from a girl into a boy and back to a girl carelessly and happily and she enjoys corrupting me and I enjoy being corrupted. But she's not corrupt and who says it is corruption? I withdraw the word. Now we are going to be a special dark race of our own with our own pigmentation, [and we already have our own tribal customs—crossed out in manuscript] growing that way each day as some people would garden or plant and raise a crop. The trouble with that is that it will not grow at night too. It can only be made in the sun, in strong sun against the reflection of the sand and the sea. So we must have the sun to make this sea change. The sea change was made in the night and it grows in the night and the darkness that she wants and needs now grows in the sun.

(#422.1/2, chap. 4, p. 4; Comley 92-93)

この引用は、出版本では第一部に該当する。男の子のように髪を短く切ったキャサリンが、夫デイヴィッドが横たわるベッドにもぐり込み、新たな性の試みとして、夫婦の性役割の交換を求める場面である。初めての実験的行為が終わった後、デイヴィッドは終わったばかりの行為について上記のように思い巡らすのだが、この場面の大半は編纂によって削除されている。

またカムリーらの解釈によれば、ヘミングウェイは「性の真実」が白人同士の異性愛的な関係の中ではなく、その周縁にあるもの、すなわち性倒錯や異種混交などの文化的なタブーの中に存在すると考えていたという (Comley 77-78)。こうした考えはニック・アダムズ物語の

ひとつ「父と子」(“Fathers and Sons,” 1933)にも見られる。性について保守的だったニックの父は、息子に「マスターベーションをすれば、目が見えなくなったり、精神病になったり、死んでしまうこともある」(CSS 371)と誤った情報を提供してごまかそうとする。そんな父に代わって性の知識を与えるのがインディアン少女トルーディ (Trudy) である。物語の後半でトルーディは、彼女の異母兄のエディー (Eddie) がニックの妹に性的関心を持っていることを耳にして激怒するニックをなだめつつも、彼を性行為へと誘っている。

さらにカムリーらは、こうした性的「境界の逸脱 (transgressions)」(Comley 89)こそが、芸術家に「芸術的『真理』(artistic “truth”)(Comley 89)をもたらすのだということを、ヘミングウェイがデイヴィッドの「アフリカ物語」執筆の場面を通じて訴えようとしたと主張している。カムリーらはその証左に、デイヴィッドが実際にこの物語を書き終えたのが、マドリッドで性役割を交換したセックスをし、彼とキャサリンの新婚旅行にマリータが加わった後であったことを挙げている (Comley 101)。まさに「デイヴィッド・ボーンが発見したいと思っている真理は、未知の国アフリカに存在するため、彼はどんなことをしてでもその境界に到達しなければならない。こうして物語は境界の逸脱から逸脱へ、変容から変容へと進み、ますますアフリカに近づく」(Comley 95)のである。

しかしこの「アフリカ物語」は、大半が編纂でカットされ、出版本の『エデンの園』ではほんの一部しか用いられていない。さらに出版本では、キャサリンがデイヴィッドの原稿を燃やして去るものの、代わりにマリータが作家としての人生、そしてより「正常な (normal)」(Comley 102) 性生活にデイヴィッドを戻した印象を与えている。しかし、実際にオリジナル原稿の最終場面が示しているのは、キャサリンの後を忠実に追おうと躍起になるマリータの姿である。マリータはアフリカ女性の容貌に近づくべく「毛を短く刈り込まれたビーヴァー」(#422. 1/36, 1; Comley 100)のようになり、デイヴィッドと新たな性役割交換の試みを行う。そしてその「逸脱」こそが彼に新たな創作をもたらす。つまり「オリジナル原稿は、デイヴィッドの創造力を生き生きと復活させたのが、まさに彼らの関係の『異常さ』(“abnormality”)であったことを示している」(Comley 102)のである。

カムリーらの手法は、人種の変化に関する性愛的な夢想を、オリジナル原稿の分析を通じて明らかにするというものであった。ヘミングウェイ作品に関する従来のマニエスクリプト研究がとかくオリジナル原稿と出版本の相違点の指摘に終始する傾向にあったことを考えれば、カムリーらのマニエスクリプト研究は、ヘミングウェイのセクシュアリティ研究に一石を投じているという点で大きな転換期になったと言えるだろう。

しかしカムリーらの考察は、モデルモグも指摘しているように、ジェンクスが削除した文章や場面を論の証拠立てにしながらも、ジェンクスがそれを削除しなければならなかった理由にまでは及んでいない (Moddelmog 59-60)。さらに問題視されているのは、トニ・モリスン (Toni Morrison) が『白さと創造力』(*Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*, 1992)において、カムリーらの主張と極めて近いことを、オリジナル原稿に目を通すことなく指摘し

ている点である。“[the] voluptuous illegality [of *The Garden of Eden* is] enforced by the associations constantly made between darkness and desire, darkness and irrationality, darkness and the thrill of evil.” (Morrison 87) このような状況下、オリジナル原稿を援用しつつ、カムリーらやモリスンの主張に精神分析を織り交ぜて独自の論を展開したのが、次に扱うエビイの論文である。

エビイは、『エデンの園』の登場人物にみられる「変化」がセクシュアルな意味だけでなく人種的な意味も含んでいるとするモリスンの主張を、編纂の過程でカットされたキャサリンのセリフを複数引用することによって証明している。たとえば、日焼けに躍起になるキャサリンが “[to be] dark enough not to be white” (#422.1, 4.3.1 ; Eby 101) や “[to be as] brown as a Kanaka” (#422.1, 2.1.1 ; Eby 101) を望んでいることや、自身を夫デイヴィッドの “lazy naked octoroon half-caste wife” (#422.1, 5.5.2 ; Eby 101) と呼んでいること等である。また、キャサリンが作家として成功しているデイヴィッドに嫉妬心を抱くことの言い訳にまで、日焼けがなかば強引に結びつけられている。“I can’t help it any more than if I were a negro.” (#422.1, 2.3.3 ; Eby 101)

カムリーらも指摘していることだが、アフリカ化を目指して日焼けを繰り返す行為はキャサリンだけでなく、マリータにも引き継がれている。この背景には、表面的には、デイヴィッドが少年時代にアフリカ少女に恋心を抱いていたという事実がある。しかしエビイはそこに、白人にとって人種的他者である黒人を原始主義 (primitivism) と結びつけようとするヘミングウェイの態度を読み取っている。そしてその根拠として、ジェンクスによって完全に削除された三人の登場人物 [ニックとバーバラのシェルドン夫妻、そしてバーバラの不倫相手でもあった作家のアンドルー (Andrew)] の場面を挙げている。ここでアンドルーは、シェルドン夫妻に関するモノグラフを書こうとするのだが、二人のことを思い巡らしながら “[the] things they did were primitive.... It was all very primitive” (#422.2, 40. inserts.10 ; Eby 101) と繰り返す。シェルドン夫妻の間でも日焼けと性役割交換の試みが行われていることを考慮すれば、この “primitive” という言葉の背後に、“origin” “simple” “spontaneous” “pure”、また “mysterious” “lustful” “irrational” “defiled” といった、西洋の白人が伝統的に構築してきた原始人 (the primitive) のステレオタイプが潜んでいることは明らかである、とエビイは主張したのである (Eby 103)。

またエビイは、キャサリンの人種の変化を、彼女の性心理的な変化の一部として読むことができる」と述べている。彼女の黒く日焼けした肌は、白人社会においては「規範 (proper)」からの逸脱と、社会的タブーを意味する。しかしキャサリンにとっては、その黒い肌こそが自身のアイデンティティ構築に不可欠なものとなっている。作中、キャサリンはデイヴィッドの旧知であるジョン・ボイル陸軍大佐から、こんなに肌を焼いてどうするつもりなのかと尋ねられる。彼女はそれに対して、“Wear it.... It’s very becoming in bed.... I don’t really wear it. It’s me. I really am this dark. The sun just develops it. I wish I was darker” (GE 64) と答える。彼女が日焼けという行為から得る心理的な満足感、その黒く日焼けした肌が白のベッドシーツに映えるという主張、また髪を男の子のように短くしたり、日焼けで肌を黒くすることに対する強迫観念を『エ

『エデンの園』における性の試みや倒錯と結びつけようとするキャサリンの傾向は、彼女の人種の変化が、性心理的な変化の一部であることを明確に裏付けていると言える。

最後に、デブラ・モデルモグの『エデンの園』論に移ろう。彼女は著書の中で、従来のヘミングウェイ批評や伝記の動向が「相も変わらず男らしく異性愛者のヘミングウェイを保持しようと努める確固たる信念の一部になっている」(7) ことを踏まえ、ヘミングウェイの性的アイデンティティを、特に同性愛者と異性愛者の緊張関係の中で捉えようとした。

モデルモグも、西尾やカムリーらと同様、『エデンの園』のオリジナル原稿と出版本の比較・検討を議論の柱としている。彼女の主な論考は、ひとつに、ジェンクスによる編纂作業が「市場におけるヘミングウェイの商品価値を維持するために、疑問を差し挟む余地がないほど男らしく異性愛のヘミングウェイという世間一般のイメージを増殖させ」(7) ていることを明らかにする点である。そしてもうひとつの論考は、ジェンクスによって削除された箇所から浮かび上がるのが、ヘミングウェイの「欲望が同性愛／異性愛、男性／女性といった二項対立の間を流れ、決してそのどちら側にも安住の地を見出すことはない」(7) という点である。これは、カムリーとスコールズが結論づけたデイヴィッドとマリータの関係の「異常さ」に関して、具体的にヘミングウェイのオリジナル原稿でどのような「異常さ」が構成され、それがどのように機能しているかについての議論が見落とされていると指摘したことには端を発している。ここでは、特に後半に重点を置いて、モデルモグの論を確認していく。

モデルモグはまず、『エデンの園』のオリジナル原稿と出版本のもっとも著しい相違点として、両者がマリータに割いているページ数の総数を挙げる。出版本の結末場面におけるマリータが、デイヴィッドを「正常な」生活に戻す役割を担っていることは、すでにカムリーらによって指摘されている。しかしモデルモグによれば、出版本における異性愛で一夫一婦主義、自己犠牲的に夫に尽くすマリータのイメージは、オリジナル原稿ではさらに強固なものであるという。たとえば、編纂過程で削除されたマリータの経歴から、彼女は「父権制を脅かすあらゆる女性(処女、離婚した女、レズビアン)の結合体」(64) として規定されている。彼女はデイヴィッドとベッドを共にするまで、前夫を含めて、男性にも女性にも性的に満足したことがない、つまりオルガスムを知らない「処女」同然であった(#422.1-16, p21; Modellmog 64) が、デイヴィッドの優れた性的能力の結果、キスをするだけで性的絶頂に達してしまうほどになる(#422.1-19, p18; Modellmog 64)。こうしてデイヴィッドから性の歓びを存分に受けることによって異性愛者へと転向したマリータは、かつては父権性を脅かす女性であったことの苦悩と、異性愛へ仲間入りしたことの喜びをとうとうと語る(#422.1-18, p11, 2nd p.11; Modellmog 64) というのである。

マリータの異性愛への転向とその喜びが(オリジナル原稿において)過度に強調されているという事実、そしてそれがデイヴィッドによってもたらされたと何度も念押しされている点にモデルモグは着目する。そして、ヘミングウェイがこれらの描写を通じていったい何を表し、

何を覆い隠そうとしたのかという疑問を提起する。

モデルモグはこの疑問を、同じくオリジナル原稿で大幅に削除された「同性愛」「ロダンの彫刻」というキーワードから読み解くことによって、登場人物だけでなく、ヘミングウェイまでもが同性愛の欲望に魅せられていたことを主張しようとしている。作品の冒頭で、キャサリンがデイヴィッドに性役割の交換を提案し、実行に移す場面をみてみよう。彼女は夫に「キャサリン」という名を与え、その一方で自らは男根のスラングでもある「ピーター (Peter)」⁴⁾を名乗る。そして暗闇に包まれたベッドで彼女がデイヴィッドの上になると、「彼を押さえて下の方をまさぐ」(GE 17)り始める。「彼は両手で彼女を導き、暗闇の中で仰向けになり、何も考えずに、ただ体の内部の重みと不思議な感覚を味わっていた。すると彼女が言った。『さあ、誰がだれだか分からないでしょ?』」(GE 17) キャサリンのこの行為を巡っては、これまでさまざまな解釈がなされてきたが、モデルモグはヘミングウェイがオリジナル原稿に書いている一節——デイヴィッドが「何か、たわんで入り込んでくるもの (something that yielded and entered)」(#422.1-1, p.20; Moddelmog 69)を感じた——を手掛かりに、キャサリン／ピーターが、デイヴィッド／キャサリンを刺し貫く、つまり、ソドミーを行ったと主張したのである(68-69)。

しかしこれは単に、異性愛を前提とした性的アイデンティティの「交換 (男←→女)」だけを意味するのではなく、同性愛をも内包するものである。なぜなら、キャサリンがこの行為を思い立ったきっかけが、二人の女性が抱擁し合うオーギュスト・ロダン (Auguste Rodin) の彫刻『オウィディウスの変身物語』(*Les Métamorphoses d'Ovide*, 1889 以前) だったからである。モデルモグは、キャサリンがこの彫刻に感銘を受けた背景に、同性に魅力を感じるによってセックス／ジェンダーに変化をもたらしたいとの欲望が目覚めたと指摘している。キャサリンがデイヴィッドに「でもあなたに触れて抱きしめて、あなたが私の男の子で、同時に女の子でもあるのが分かるってすてきね (But it's so nice just to fell and hold you and know you're my boy and know you're my girl too)」(#422.1-12, chap.18; Moddelmog 70) と言うとき、彼女の脳裏には、男性と女性の結びつきだけではなく、デイヴィッドが演ずる「キャサリン」とキャサリンとのレズビアンを組み合わせも想定しているはずである⁵⁾。つまり、当作品のオリジナル原稿では、「キャサリンとデイヴィッドの性的変化に関して、性的欲望は複合的なものとして、ジェンダー・アイデンティティは流動的なものとして表現されている」(Moddelmog 70) のである。

またモデルモグは、この同性愛への指向が、キャサリンだけでなくデイヴィッドにも見受けられると指摘する。性行為において女性の役割を担うことで、特にソドミーの受け手になって「刺し突かれる」ことに同意することによって、デイヴィッドは同性愛の男に関する通念に同調しているというのだ。さらに、マリータなどの女性に対して欲望を抱くキャサリンのために女性の役割を演じることも、いっそう彼自身の異性愛指向に疑念を向けさせている。モデルモグの指摘によれば、それが決定的になるのは、彼が髪を漂白することに同意した瞬間だという。20世紀初頭のニューヨークでは、ゲイの男たちは髪を漂白するなどして「自分の存在をはっきりと知らしめて」(Chauncey 3, 54) いたし、ヘミングウェイが所有していたジョージ・W・

ヘンリー (George W. Henry) の *All the Sexes: A Study of Masculinity and Femininity* (1955) にも、「髪を漂白している男性は、間違いなく同性愛者だとほぼ確信をもって言える」(Henry 291) と記されているからである。

出版本では、ジェンクスの大がかりな編纂のおかげで、異性愛に転向したマリータの支えを得たデイヴィッドは、どうにか同性愛を自己認識する瞬間を回避することができる。ところがオリジナル原稿では、事態はさらに複雑な様相をみせる。なぜなら、デイヴィッドはキャサリンとしたさまざまな性の試みを物語の形で残しており、それを通じてマリータが彼の性癖や同性愛の指向を知ってしまうからである。マリータはキャサリンの跡を継ぐかのように肌を黒く焼き、男の子のように短髪にする。そんな彼女の変化を見て、デイヴィッドはあからさまに喜ぶ。そして「ホテルでデイヴィッドはついに自分の欲望を明かし、変わってみたいと言い、二人が愛しあった後、そんなにすぐに女の子に戻る必要はないよ、とマリータに言うのだった (At their hotel, David finally states his desire, claiming that he wants to make the change and telling Marita, after they make love, that she didn't have to change back to a girl so soon)」(#422.1-36, pp.31-33; Moddelmog 81-82)。一方のマリータは、デイヴィッドが自らの異性愛者としてのアイデンティティに懸念を抱くことがないように、彼に「倒錯なんかじゃないわ。変化よ (It's not perversion. It's variety)」(#422.1-36, p.5; Moddelmog 82) と念を押す。これによって、ふたりは「あの連中 (those people)」と呼ぶ同性愛者と自分たちを区別することができるという訳である。

セクシュアリティにまつわるデイヴィッドの不安を払い除けようとするヘミングウェイの試みには、『エデンの園』を執筆当時、妻メアリー (Mary) によって同じ行為に巻き込まれていた彼自身の不安が読み取れる。このことはモデルモグの他、島村法夫らによって指摘されている (Moddelmog 82-83, 島村 192-93)。島村は、ヘミングウェイとメアリーが性的刺激の昂揚のために、物語同様、性的役割の交換をしていた可能性を示唆している。このときメアリーはヘミングウェイを「キャサリン」と呼び、ヘミングウェイはメアリーのことをピーターの愛称「ピート」(Pete) と呼んでいたという。さらにメアリーの自叙伝『実際のところは』(*How It Was*, 1976) には、ふたりが記者会見ごっこをしたときのことが綴られている。ここで記者に扮したメアリーから、好きなスポーツが何かを訊かれたヘミングウェイは、「ハンティング、釣り、読書、それにソドミー」(368) と答えている。

これらのことを念頭に、ヘミングウェイがメアリーの日記に書き込んだ内容を確認していこう。時は 1953 年 12 月 20 日である。

Mary has always wanted to be a boy and thinks as a boy without ever losing any femininity.... She loves me to be her girls, which I love to be, not being absolutely stupid.... In return she makes me awards and at night we do every sort of thing which pleases her and which pleases me.... Mary has never had one lesbian impulse but has always wanted to be a boy. Since I have never cared for any man and dislike any tactile contact with men except the normal Spanish abrazo or embrace which

precedes a departure or welcomes a return from a voyage or a more or less dangerous mission or attack, I loved feeling the embrace of Mary which came to me as something quite new and outside all tribal law. On the night of December 19th we worked out these things and I have never been happier.

(Mary Hemingway 369-70; 省略符号は原文のまま)

ここから二つのことが導き出せるだろう。ひとつは、ヘミングウェイ文学の中でも異色を放っているように見える『エデンの園』も、実は他の多くの作品と同じようにヘミングウェイの実生活に結びついていること、そしてもうひとつは、モデルモグも指摘するように、彼もデイヴィッド同様、同性愛に関して筋の通った論理を回避しているということである。夫婦が同性愛者であることを否定しても、それがそのままふたりが異性愛者であることの証にはならないからだ。モデルモグの試みは、こうしたヘミングウェイの一貫性の欠如を、彼の性的アイデンティティが異性愛と同性愛の間で揺らいでいることと重ね合わせることであった。ジェンクスによって削除された場面を考察に組み入れることによって、ヘミングウェイの同性愛の欲望を顕在化させた彼女の功績は、「完全な男らしさとその地位を維持するために性差別主義や同性愛嫌悪を公言せざるを得ないある種の男らしさ（ホモソーシャリティ）に基づくペルソナ」(Modellmog 85)を背負っている／背負わされているヘミングウェイの別の一面を浮き彫りにした点で重要なものであったと思われる。

注

- 1) 出版当時、チャールズ・scribner・Jr. (Charles Scribner, Jr.) は『エデンの園』がセクシュアリティを主要テーマとしているために、出版が大きく遅れたことを認めた (Nesmith)。彼はまた、1986年に「[ヘミングウェイが亡くなった] 25年前に比べれば、今はバイセクシュアリティのテーマもさほど奇妙ではない」(McDowell) と語っている。実際、同年4月28日付の『パブリッシャーズ・ウィークリー』(Publishers Weekly) にも、『エデンの園』の宣伝用に“so provocative it could only be published today” と謳っている。
- 2) ネスミスの論文“‘The Law of an Ancient God’ and the Editing of Hemingway’s *Garden of Eden*: the Final Corrected Typescript and Galleys” は2001年の *The Hemingway Review* に掲載されているが、以下のHPにも全文が公開されている。本論文では、HP版の論文を参考文献として用いた。ただしHP版には頁数が掲載されていないため、引用箇所にはNesmithの名前のみを記すこととする。<http://findarticles.com/p/articles/mi_6754/is_2_20/ai_n28125254/> (2009年6月1日)
- 3) アーネストと姉のマーセリンは、母グレイス (Grace) の意向で幼少期に女の子の双子として育てられた。二人が愛らしい幼児用ドレスと帽子を身にまとい外出する姿や、お揃いのおかっぱ頭で家族写真に納まる姿が残されている (スビルカは、アーネストのこの幼児体験を、彼の両性具有性を紐解く鍵と見なしている)。
- 4) カール・エビィによれば、『エデンの園』のオリジナル原稿では、ヘミングウェイが「ピーター」

- という名前と男根との連想を次のように強調しているという。「私はペニスを意味せずにピーターと名付けられた人を誰も知らない」(Eby 115)。
- 5) モデルモグはさらに、キャサリンがデイヴィッドの髪を自分と同じにするよう頼み込む場面にも、彼女のナルシズムとレズビアン志向を読みとっている。キャサリンは、同じ髪型になったデイヴィッドを「キャサリン」と命名、これによって自分自身とセックスをすることが可能となる。また髪型だけでなく、肌も(キャサリン同様に)黒く焼くようデイヴィッドに迫り、外見をうりふたつにしようとする。女性化されたデイヴィッドとキャサリンは、端から見ればレズビアンのように見える。そしてそれを確認するために、彼女はグロ・デュ・ロアのバーに鏡を取り付けたいと願ったと解釈したのである(73)。

Works Cited

- Burwell, Rose Marie. *Hemingway: The Postwar Years and the Posthumous Novels*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Chauncey, George, Jr. *Gay New York: Gender, Urban Culture, and the Making of the Gay Male World, 1890-1940*. New York: Basic, 1994.
- Eby, Carl. “‘Come Back to the Beach Ag’in, David Honey!’: Hemingway’s Fetishization of Race in *The Garden of Eden* Manuscripts.” *The Hemingway Review* 14.2 (Spring:1995): 98-117.
- Fleming, Robert E. *The Face in the Mirror: Hemingway’s Writers*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1994.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. New York: Scribner’s, 1987.
- . *The Garden of Eden*. New York: Scribner’s, 1986.
- . *The Garden of Eden*. Ernest Hemingway Collection, Manuscript, 422.1-2, at the John F. Kennedy Library, Boston, MA.
- Hemingway, Mary Welsh. *How It Was*. New York: Knopf, 1976.
- Henry, George W. *All the Sexes: A Study of Masculinity and Femininity*. 1955. New York: Octagon, 1978.
- McDowell, Edwin. “New Hemingway Novel to be Published in May.” *New York Times* (17 December 1985): C21.
- Moddelmog, Debra A. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Ithaca: Cornell UP, 1999.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Cambridge: Harvard UP, 1992.
- Nesmith, Chris L. “‘The Law of an Ancient God’ and the Editing of Hemingway’s *Garden of Eden*: the Final Corrected Typescript and Galleys.” *The Hemingway Review* 20.2 (Spring 2001). <http://findarticles.com/p/articles/mi_6754/is_2_20/ai_n28125254/> (2009年5月15日).
- Pooley, Eric. “Papa’s New Baby, How Scribner’s Crafted a New Hemingway Novel.” *New York* (28 April 1986): 50-59.
- Solomon, Barbara Probst. “Where’s Papa?” *The New Republic* (9 March 1987): 30-34.
- 島村法夫『ヘミングウェイ——人と文学』勉強出版、2005年。
- 西尾巖『ヘミングウェイと同時代作家——作品論を中心に』鳳書房、1999年。

(2011.10.5 受稿, 2011.11.25 受理)